

ストーリーで学ぶ資料図の活用

愛知教育大学教授 寺本 潔

個人的な話で恐縮であるが、今この原稿をアメリカのミネソタ州のホテルで書いている。あのNHKのTVドラマで有名な「大草原の小さな家」というインガルス一家の開拓物語の舞台にもなった中西部の州である。広大な小麦やとうもろこし畑が展開し、ミシシッピ川がゆったりと州内を流れている。アメリカの心が詰まったハート・ランドと呼ばれる地区であるが、ポストイットなどを開発した3M社や映画製作など最先端の産業も盛んな双子都市（ツインシティ）もある。もちろん出張には常に地図帳を携えているのでページをめくっては愉しんでいるが、地図帳は、たとえばというならば、地球という球体の布地に人間が織り成した絵柄や模様がいっぱい詰まった服飾辞典のようにも見える。とりわけ世界の国や日本国内の姿が載っている一般図が、服の生地であるなら、資料図は生地に印刷されたり、織り込まれたりしたお国柄が主張する個性的な色や形であり、資料図こそが実は地図帳を面白く読み取るうえで大切であることに気がつく。資料図が十分に読み取れずに使っていても服飾辞典が面白くなるわけがない。個性的な色や形をしている絵柄だからこそ、じっくりとその絵柄に込められた由来や現状に至る過程を一種の物語（ストーリー）を想定しながら読み取らせるよう指導する必要がある。筆者が滞在しているアメリカ合衆国を具体例として以下解説してみたい。

1 アメリカ合衆国を移民の目でよむ

帝国書院『中学校社会科地図』p.50および55～57にかけて掲載されているアメリカ合衆国に関する資料図は、比較的わかりやすいストーリーが設定できる。それは「人々のアメリカン・ドリーム」というストーリーである。「アメリカっていう国はどんな国であるかある程度は皆さん知っているでしょう？」「世界の超大国で文化の面でも身近に感じる国だよね。」「アメリカがわかるコツは夢（アメリカンドリーム）です。」と切り出して授業を始めてはいかがであろうか。夢の実現に向けて多くの人々が新大陸に渡り、現在でもアメリカ合衆国の絵柄を織り続けているからである。資料図にはストーリーを組み立てる材料となる図や表、絵、写真などがたくさん掲載されている。アメリカン・ドリーム物語でまず最初に取り上げてほしい資料は、建国の歴史である。p.50の「**A**国の成立と移民」の地図とその中の年表「**①**アメリカ合衆国の歴史」に注目させたい。

表紙Ⅱに掲載した「**A**国の成立と移民」「**①**アメリカ合衆国の歴史」の年表をみよう。

「1584年イギリスが植民開始」「1776年独立宣言」「1869年大陸横断鉄道開通」などあり、長く見積もっても420年ほどの歴史しかない国であることがわかってくる。だからこそ、「新大陸への夢を抱いた人々による開拓

と発展」というストーリー立てが、この国を理解するうえで重要であることを強調してほしい。「移民」はアメリカの過去と現在をつなぐキーワードであり、前ページ (p.49) の一般図 (大西洋) の中にもヨーロッパやアフリカからの移民や移動のルートが示されている。しかも日本人も過去に多くの移民をアメリカに出していることが、「㊦日系の人々の住む州」の円グラフからわかる。

必ず、人差し指で移民が渡ってきたルートを辿る作業を一般図で生徒たちに指導しておきたい。そうすれば、指先から移民の立場でアメリカを見つめる目ができる。

移民の人々にとって共通するのが「夢」である。「アメリカに行って働き、幸せになりたい!」と誰しも思ったであろう。資料図「B アフリカ系とヒスパニックの居住地域」や「C 住民の内訳」を見ても、彼らの祖父母や父母が「夢」を抱いてアメリカに渡ってきて定住している姿が見えてくる。とくに、その重要な窓口がニューヨークである。

p.50の下部にあるニューヨークの絵図を示し、「エリス島」に着目させてほしい。この島こそ、夢を抱いて渡ってきた移民たちが最初に上陸したアメリカだからである。

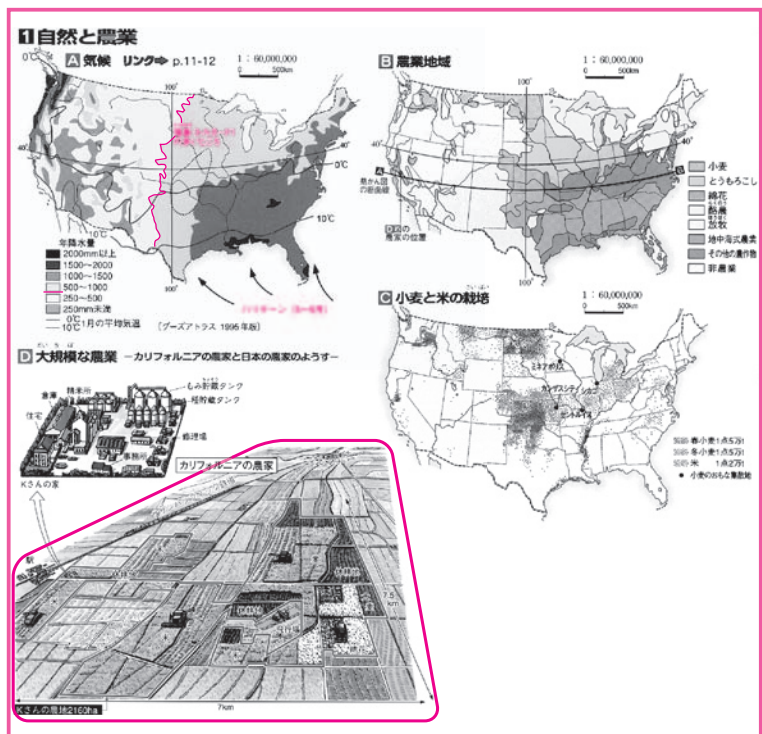
東京の山手線の中にすっぽりと入ってしまうニューヨークであるが、絵図の中にも中国人街やイタリア人街などのエスニックな街角が示され、「人種のサラダボウル」としてのアメリカがこの絵図からも読み取れる。

ここで様々な人種が働くニューヨークの街角の写真などが提示できれば、一層ストーリー

が描き出しやすいだろう。

2 産業もストーリーで理解する

次に、p.55~57にかけてもアメリカ合衆国の資料図が続いている。「自然と農業」「工業」「日本との結びつき」の3つが柱となっている。その中で「自然と農業」(p.55)の資料図に配置されている3つの地図と1つの絵図は、まさに「大草原の小さな家」でも描かれた農業開拓のストーリーが読み取れる資料でもある。ハリケーンやトルネードにおびえながら、農家が農地を広げていったこと。年降水量500mm以上を示す黄緑色と500mm以下の黄色の境界が小麦やとうもろこしなどの栽培という絵柄の境になっている事実などは3つの地図を重ね合わせると見えてくる。さらに、日系人も従事した西海岸の農業も

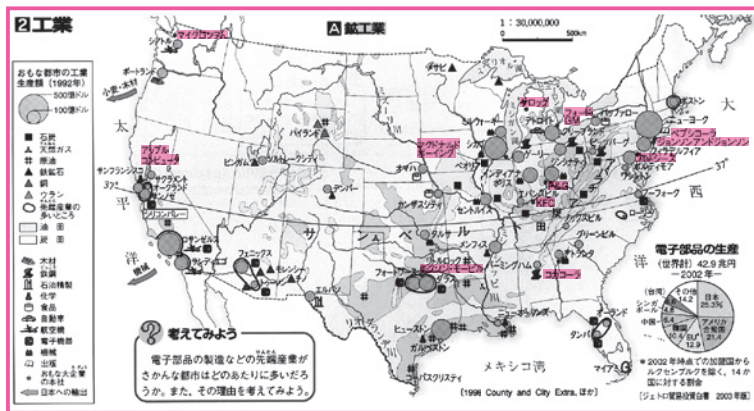


「中学校社会科 初訂版」p.55

大規模なカリフォルニアの農家の絵図から読み取れる。現在では大型コンバインや飛行場

なども備え機械化された農業の実態などが絵図からわかる。もちろん最初からこのような大規模な農場が成立していたのではないことは明らかである。夢を実現するために、西部や中西部の農業を大規模化していった開拓物語がこれらの資料図の背景に見えてくる。

鉱工業の分布を示した図 (p.56) もアメリカン・ドリームの宝庫である。赤文字で印刷されている企業名 (例：フォード、マイクロソフトなど) に着目させてほしい。おもに東部南部と西海岸に重工業や先端産業が集まっ



「中学校社会科地図 初訂版」p.56

ている事実とそれらの産業を興していったヘンリー＝フォードやビル＝ゲイツなどの人物の夢が見えてくる。現在は世界の中で占めるシェアが大きく、巨大な企業として成長している姿が「Bアメリカ合衆国企業の海外進出一コンピュータ会社」や「C世界の巨大企業売上高と国内総生産の比較」の地図やグラフでも判明してくるので、アメリカン・ドリーム実現物語が描けるはずである。

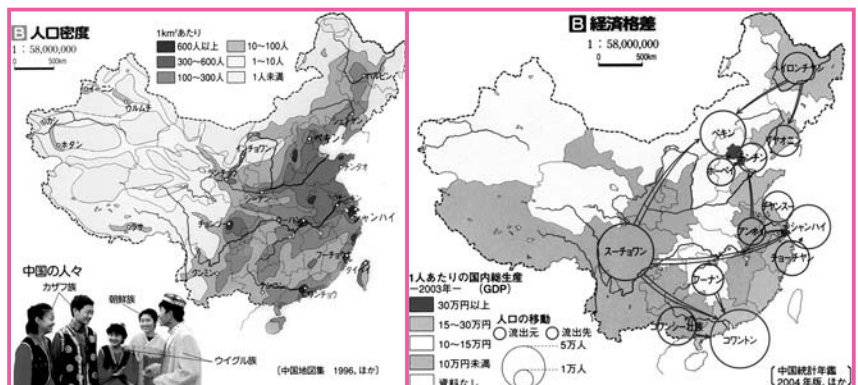
さらに、p.57には「アメリカへの日本の工場の進出」や「日

本がアメリカ合衆国から輸入する商品と身近な製品の発祥地」の2つの資料図が掲載されていて、日米双方の人間にとってもアメリカが夢の実現に重要な舞台を提供してくれる実態が伝わってくる。夢の実現に向けて日米やあるいは世界中の国々との間でアメリカン・ドリームが文字通りアメリカ人だけの夢でなく、「アメリカにかかわる」という意味での「アメリカン」という言葉が共有されつつあるのではないだろうか。

つまり、資料図を教える窓口として「アメ

リカン・ドリーム物語」のようなストーリー設定を念頭において指導するか否かの違いだけではあるが、生徒たちの目に地図帳が無味乾燥な字引として映るか、それとも魅力的な地球の絵柄が解説された辞典として映るかにわかれるように思われる。こういった

指導方法は、たとえば中国の資料図 (p.21～22) でも有効で、「成長する華人社会と広がる格差」というストーリーを立てて、郷鎮企業で働く中国の少女が農村から都会に出て働く物語を念頭にして教えていけば、資料図を関連づけて読み取れるだろう。



「中学校社会科地図 初訂版」p.22